

タイトル	ドラッカー思想の焦点に関する一考察：人間個人と国家をめぐって
著者	春日，賢； Kasuga, Satoshi
引用	北海学園大学経営論集，18(2)：15-22
発行日	2020-09-25

ドロッカー思想の焦点に関する一考察¹

— 人間個人と国家をめぐって —

春 日 賢

はじめに

メイン・テーマ「自由」実現²を座標軸に、ドロッカー思想の焦点そして枠組みとして、「個人」と「国家」とを浮き彫りにすることが本稿の課題である。

ドロッカー思想を一言をもって約すれば、「自由」の実現をめざす「新しい社会」論といえることができる。危機の時代に、既存社会になりかわる「新しい社会」の実現がめざされたのである。そのプロセスで、「マネジメント」も生み出された。ドロッカーにとって「マネジメント」は自らの社会論の帰結であって、社会とリンクしない「マネジメント」などありえない。「新しい社会」実現の実践かつ象徴こそが、「マネジメント」であった。実に70年以上にわたる文筆活動もみな、かかる「新しい社会」実現のために行われたのである。ただしここにいる「自由」が「責任ある選択」と独自に規定される点で、他とは一線を画する。ドロッカーの「新しい社会」論とは、各行為主体自らが意思決定を行う「責任ある選択」実現のためのものとしてあったのである。

「責任ある選択」で特徴的なのは、その担い手として個の強い個人が想定されていることである。そしてかかる個人を論じる視線の先にあるのは、国家である。強大な国家に対峙する存在として、強力な個人が想定されているのである。つまるところ、メイン・テーマ「自由」=「責任ある選択」の背後にあるのは「個人」「国家」ひいては「個人と国家」への強力な問題意識といえる。以上についてドロッカーの個人史もふくめて整理・検討し、読み解いていく。まずドロッカー思想の軌跡を追う。メイン・テーマ「自由」そして「自由で機能する社会」を座標軸に、大きくは人間個人論と社会論として展開していった思索を跡づける。この二論において、「マネジメント」の誕生と完成も大きく位置づけられることとなる。これをふまえたうえで、ついで「自由」=「責任ある選択」そのものの意義を検討する。かくて彼の思想が最終的に行き着くのは、「個人」「国家」ひいては「個人と国家」にほかならないことを明らかにするものとする。

I

まずドロッカーの基本的な視点とアプローチを確認しておこう。彼は自らを「文筆家」、「社会生態学者」、「傍観者」と規定した。「文筆家」とは文章を書くことを職業とする者であり、ドロッカーのキャリアそのままである。「傍観者」とは物事の実態をありのままにとらえられる者、すなわち最高の観察眼を有する者であり、「文筆家」にとっては不可欠の資質である。対象

を客観視し本質を見通すことができればできるほど、透察した文章を書くことができるからである。これらに対し、「社会生態学者」とはドラッカーの造語による学問分野であり、広範な彼の守備範囲を包摂するものである。「傍観者」は彼個人の視点をあらわすものとして、少年時代の人格形成期以降にもとめられうる。「文筆家」は彼が傍観した現象を文章化することを生業とした時期で、およそ成人した青年期以降に該当する。「社会生態学者」は彼が傍観し文章化してきた対象領域をあらわすものでもあるが、語そのものの登場は還暦頃である。明確に概念化されたのはかなり遅いものの、そのようなものと自覚していたのは「文筆家」となった時期と同じと考えて差し支えなからう。

ここでドラッカーが生きた時代（1909-2005）を確認しておけば、20世紀をほぼカバーしている。物心ついた頃の第一次世界大戦の勃発にはじまり、ソ連共産主義の誕生と崩壊、アメリカの繁栄と世界大恐慌、全体主義の台頭と第二次世界大戦、戦後の東西冷戦とその崩壊、日本の高度経済成長、21世紀初頭のアメリカ同時多発テロの発生、中国の成長などがあつた。この間、新しいエネルギーや原材料の発明・利用、輸送技術の発達、コンピューターやインターネットの発達と世界的普及など、あらゆる科学技術と学問分野における未曾有の発展がみられた。これらを傍観し文章化していったドラッカーとは、まさに「20世紀の目撃者」といえる存在であった。その際、常に戦争を意識せざるをえない状況下で「人間ドラッカー」が形成されていったのは看過しえない。戦争こそが、ドラッカーの原風景なのである。

そして彼が書き記した内容をあらわすものこそ、社会生態学であった。ドラッカーによれば、社会生態学とは科学ではなく実践（Practice）である。知識を行動のための道具とし、総体としての形態をあつかいながらも、分析よりも観察と知覚を土台とする。そしてその問題意識は、「継続と変革の相克」にある。変革の時代にあつて、新旧諸制度をいかに生かしていくのか。継続するものの必要性和変革するものの必要性和との間にある相克を、社会と文明の中心的課題とにするというのである。そこでまずドラッカーが対象としたのが、国家であった。実に真の処女作『シュタール』（33）での焦点は、法治国家の発明、すなわち新旧間のバランスをとって社会的安定を試みた新たな組織の発明にあつた。戦間期の激動にあつて歴史の断絶をみたドラッカーは、同様の危機的状況を乗り切った手本としてシュタールをとりあげたというのである。旧来からの社会的安定の断絶に際して、変革によって新たな社会的安定をはかったもの、しかもかかる変革と伝統をうまく調和させることで新たな社会的安定を実現したものとしてである。これこそが、「継続と変革の相克」だとするのである。

この「継続と変革の相克」から、以後の終生にわたってドラッカーは筆をすすめていった。その基盤をなすのが、初期の社会論『経済人の終わり』（39）と『産業人の未来』（42）である。実にドラッカーにおいて前著は思想的な原点、後著は理論的な起点と位置づけられうる。前著の底流にあるのは、旧来の秩序の破綻により、社会の一体性とそのコミュニティが崩壊の運命にあるという危機意識である。そこで新しい秩序の建設が叫ばれるのであるが、それがどのようなものなのか、またどうすればいいのかに関する言明はない。方向性として、経済人にかわる人間像（非経済人）、経済至上主義にかわる社会像（非経済至上主義社会）が述べられるにすぎない。

かくて後著『産業人の未来』（42）で、めざすべき新秩序が明示されたのであつた。「秩序」すなわち「人と社会の望ましいあり方」として、人間と社会が問われ規定される。人間とは「自由」=「責任ある選択」を希求する存在であり、社会とは機能面から「社会の純粋理論」二要件³

であらわされるものとされる。ここに人間一人ひとりが「自由」を実現し、「社会が社会として機能する社会」、すなわち「自由で機能する社会」の建設が高らかにうたいあげられたのである。『経済人の終わり』での「非経済人」「非経済至上主義社会」も、方向性が明確化されて「産業人」「新しい産業社会」と指定される。このうち「新しい産業社会」については、「機能する社会」のための課題として「社会の純粋理論」二要件が設定される。しかし「産業人」については、「自由」を担う「自由人」を意図しながらも、あくまでも用語を示すにとどまり、その具体的な内容と課題を提示するまでにいたっていない。こうして「産業人」という新人間像の明示は、以後の問題として持ち越されていくことになるのである。

実に『産業人の未来』(42)後のドラッカーは、この「自由で機能する社会」建設に向けて陸続と書を著わしていった。(1)「自由」を担う「産業人」=新人間像をいかに定立し、(2)「機能する社会」のための「社会の純粋理論」二要件をいかに充足するのか。かかる二点をめぐって、考察は展開されていったのである。いずれも明示的に行われたわけではなかったが、ドラッカーの文筆に隠然と脈動するものであった。

(2)「機能する社会」のための「社会の純粋理論」二要件の考察については、比較的顕在的に行われた。まず二要件充足の担い手を企業にもとめて解決がはかられた。『会社の概念』(=『企業とは何か』)(46)を経て『新しい社会』(49)で集成されたが、しかしながら解決策として必ずしも十分なものではなかった⁴。けれども、そこからさらに企業の経営管理実践に踏み込んだことで、画期が起こる。『マネジメントの実践』(=『現代の経営』)(54)での「マネジメント」概念の誕生である。実践=各行為主体を基軸とすることで、自ら意思決定=「責任ある選択」を行う視点が獲得されるようになったのである。これにより、「社会の純粋理論」二要件を充足するのはごく一部の権力主体ではなく、すべての行為主体、われわれ一人ひとりとされることとなる。かかる「マネジメント」は『マネジメント』(73)での理論的完成を経て、営利・非営利を問わず、あらゆる組織に適用される普遍的なものとなり、生涯の集大成『ポスト資本主義社会』(93)では「ポスト資本主義社会」という「新しい社会」のイデオロギーにまで昇華されるにいたる。かくみるかぎり、「機能する社会」のための「社会の純粋理論」二要件をいかに充足するかをめぐって、「マネジメント」は誕生したといえる⁵。

上記(2)に対して、(1)「自由」を担う「産業人」=新人間像の考察については、かなり潜在的に行われた。ドラッカーにおいてそもそもそれがいかなる主体なのかを明示することができず、模索する時期が長らくつづいたのである。その道程はアメリカ特有の産業中産階級への着目をきっかけに、それをしだいに「知識労働者」へ概念化していくというものだった。新人間像として「知識労働者」が明確に体系化されたのは後期ドラッカーの起点『断絶の時代』(68)であったが、その後もドラッカーは概念的な進化の手をとどめることはなかった。しかも『マネジメント』(73)での「マネジメント」概念の完成を経たことによって、「知識労働者」はかつての「産業人」の内実をも超えた新人間像として大きく強化されることとなった。「産業人」で意図された「自由」を担う「自由人」は、「マネジメント」によって自らが行為して「自由」を獲得する「自由実現人」へとこの上もなくグレード・アップされたのである⁶。

上記(2)「機能する社会」のための「社会の純粋理論」二要件の充足を直接的な契機として、「マネジメント」は誕生した。そしてかかる「マネジメント」の存在は、(1)「自由」を担う「産業人」=新人間像の定立にも決定的な影響を与えたのである。ひるがえってみれば、「マネジメント」、すなわち各行為主体の視点から意思決定=「責任ある選択」を行うというアプローチは、

生みの親ドラッカー自身にも多大な影響を与えていたのであった。

一般にドラッカーは社会構想の転換から、前期（初期）ドラッカーと後期ドラッカーと区分して理解されている。かかる両者の間にあるのが、まさに『マネジメントの実践』（＝『現代の経営』）（54）での「マネジメント」概念の誕生であった。そしてこの「マネジメント」が『マネジメント』（73）で理論的に完成されるまでに、およそ20年の月日が流れている。この20年とは、いわばドラッカーが自ら編み出した「マネジメント」なるものを自らのなかで消化し血肉化するのに要した時間であった。「マネジメント」を自らのものとしたドラッカーが各行為主体による「責任ある選択」のアプローチを推し進めたとき、ひるがえって彼の社会構想全体もまた、自ずと変わらざるをえなかったということなのである。

かくみるかぎり、絶えず上書き修正されていったドラッカーの所説も、「自由」「自由で機能する社会」実現というメイン・テーマのもとで、ブレることなく首尾一貫していたことが認められるのである。秩序＝「人と社会の望ましいあり方」を問い、そこから「マネジメント」と新人間像「知識労働者」は生み出された。そして生涯の総決算『ポスト資本主義社会』（93）で新人間像「知識労働者」をふくめたドラッカーの想いすべてが、最終的には「マネジメント」へと集約されていったのである。

II

ドラッカーは「人と社会の望ましいあり方」を問い、「自由」そして「自由で機能する社会」の実現をめざした。ここでの枠組みは、「個人と社会」にある。その際特徴的なのは、「マネジメント」すなわち各行為主体を基軸とすることから、個の視点がきわめて強いということである。そもそも「自由」で意味される「責任ある選択」じたいが、意思決定主体としての個の立場にあるものにほかならない。そして何よりも「経済人」にかわる新しい人間個人像の定立は、文筆活動当初より終生つづけられた。まず「非経済人」をうたい、「産業人」をかかげた。そして後期ドラッカーでは「知識労働者」を体系化し、さらにこの「知識労働者」を絶えず上書き修正していったのである。実に「知識労働者」に説きおよぶ後期ドラッカーの様は執拗であり、執念すら感じさせる強いものがあつた。かくみるかぎり「自由」を担う新人間個人像の定立は、ドラッカーにとって真のメイン・テーマだったとさえいえる。「部分と全体」といったマイクロ・マクロ・リンクでみると、ドラッカーにおいては「部分」「マイクロ」がひととき強く打ち出されるのである。

もとより他方で「全体」「マクロ」についても、ドラッカーにおいては生涯を通じて重要な論点として頻りに登場していた。これまでみてきたように「社会」はもちろんながら、もうひとつの大きな存在として「国家」がある。真の処女作『シュタール』（33）はまさに国家論といってよいが、その後長い中断を経て『明日への道標』（＝『変貌する産業社会』）（57）でふたたびとりあげられるところとなった。そして同書以降は、終生の論点として継続的に登場するのである。生涯を通じて「社会」は常に強く意識されていたものの、とくに後期ドラッカーでは「国家」が意図的に大きく論じられていた。つまり後期ドラッカーでは、人間個人「知識労働者」と「国家」という「部分と全体」が並列してあつたことになる。ただし両者は「個人と国家」としてひとつの枠組みで論じられたわけではなく、あくまでもそれぞれが独立のテーマとして並行して論じられていたにすぎない¹。とはいえ、彼の底意はむしろ一体不可分の「個人と国家」に

こそある。彼が国家を論じる視線の先には常に人間個人があり、また人間個人を論じる視線の先には常に国家があった。

ドロッカーにおける「個人と国家」の問題は、もとより時代的な影響によるものであろう。彼の原風景は、人類史上未曾有の大戦争である。第一次大戦後、全体主義の台頭によって国家は強大化し、個人は蹂躪されていた。しかもユダヤ系だったドロッカーにとっては、全体主義より正確にはナチズムによって、自らの存在じたいが完全に否定される状況にあった。「全体主義国家による個人の抑圧」、さらにいってしまえば「ナチス国家によるユダヤ人一人ひとりの迫害」である。最大権力たる国家から、彼はこの世に生きる意味すら認められない者とされたのである。それでもひとりの人間として、生きなければならなかった。生きつづけなければならなかった。これこそが、文筆家ドロッカーの原体験であつたらう。

実質的な自伝『傍観者の時代』(79)に、それを物語る印象的なシーンがある。政権を掌握したナチスがフランクフルト大学にやってきて、教員会議を招集した。助手だったドロッカーも出席したが、その場でユダヤ人教員すべての即刻解雇が宣告された。問答無用でなすすべもなく、教員側は無難に終わったがわざるをえない状況だった。そしてドロッカーが目当たりしたのは、会議前にユダヤ人か否かを問わず仲の良かった教員同士が、会議後に非ユダヤ人教員がユダヤ人教員と距離をおいて退出する様だった。これをみたドロッカーは、すぐさまドイツ出国を決意したというものである⁸。ここにあるのは、教員全員が強大な国家を前に何もできない無力な個人であること、しかもユダヤ人はその国家から存在じたいをも否定された個人だということである。かかる描写では本書の視点、つとめて第三者的な傍観者の視点が貫かれ、ドロッカーは自らがあたかも非ユダヤ人教員であるかのように状況を傍観している。しかしその実態はまさにドロッカーこそが、仲の良かった教員から距離をおかれてしまった当人であり、無力であるばかりか存在じたいをも否定された個人にほかならなかった。

ドロッカー自身によれば、『傍観者の時代』(79)でとりあげたのは、基本的に自らの人間形成期すなわち自分が何かを生み出し始めた時期で、1940年代の太平洋戦争が勃発したあたりまでが対象となっている⁹。本書が実質的な自伝といえるのは、その論法にある。ドロッカーの人格形成上影響のあった多くの人々が登場し、彼がそれらの人々を傍観するスタイルですすめられる。しかしその内実は、他人について語りながら、それを通じてもっとも語っている人物はドロッカー自身にほかならないということである。自己を投影して他者を論じるのであり、彼ら登場人物の多くがドロッカーの影法師、もう一人のドロッカーとして存在している。しかも彼らの多くがユダヤ系である。彼らを傍観して語るドロッカーはナレーターでありながら、実は彼自身こそがまさに本書における真の主人公なのである。

本書の基本的な世界観は19世紀と20世紀、旧世界ヨーロッパと新世界アメリカのせめぎ合い、つまりは社会生態学の視点たる「継続と変革の相克」にある。そしてこの世界観に大きな影を落としているのが、戦争である。本書の対象時期を区分すれば、①第一次大戦前と戦中、②戦間期、③第二次大戦期である。もとより軸となっているのは人類史上未曾有の二大世界大戦であり、ドロッカーの人間形成期とは常に戦争を意識せざるをえないものだったことは明らかである。「個人と国家」の問題を深刻化させた戦争は、彼の原風景にほかならなかった。本書には、他にもそれを裏づけるエピソードもみられる。たとえば、新聞社でのドロッカーの同僚で、後にナチス殺人部隊副隊長となって「怪物」とおそれられた人物のことがある。ごく普通のちっぽけな人間にすぎなかったが、その彼を「怪物」にしてしまったナチスひいては戦争の

狂気と恐怖がリアリティをもって描写されている。

以上の個人史からも、ドラッカーにおいて「個人と国家」がいかに重要な論点としてあったかが明認できる。そこにあるのは、戦争により強大化した国家と、かかる国家に抑圧された弱い人間個人の姿である。さらに自らのユダヤ性という要素がくわわって、ドラッカーにおいて個人とは生きる意義さえもうばわれてしまう無力な存在と刻印された。この「国家による個人の抑圧」こそ、文筆家ドラッカーの原体験であった。いかに抑圧されようとも、人間は個人として生きなければならない。一人ひとりが生きる意義をもった存在として、生きつづけなければならない。かくてドラッカーがもとめたのは、強大な国家に対抗しうる強力な個人、自ら意思決定＝「責任ある選択」を行って生きる意義を自ら獲得していく人間個人像とならざるをえなかったのである。このような人間個人像の定立こそが、ドラッカーのアルファにしてオメガだったといえるのである。

おわりに

ドラッカーは危機と対峙しながら混沌に秩序をもたらしようと努力し、恒久的な解決をもとめた。われわれはドラッカー思想の軌跡を概観するなかで、以下の点をみた。まず①「自由」「自由で機能する社会」実現というメイン・テーマのもとで、ドラッカーの文筆活動は首尾一貫して行われていたこと、②かかるメイン・テーマから「マネジメント」と新人間像「知識労働者」は生み出されたこと、である。ここでの枠組みは、「個人と社会」にある。

ついで「自由」＝「責任ある選択」を検討するなかで、以下の点をみた。③そもそも「自由」＝「責任ある選択」で想定されるのは、強力な人間個人像であること、④かかる人間個人像は強大な国家を前提としていること、⑤つまり強大な国家に対抗しうる存在として、強力な人間個人像がもとめられたのだということ、⑥そしてこれらは総じて、ドラッカーの原体験「国家による人間個人の抑圧」に根ざしていること、である。かくみるかぎり、ここでの枠組みは「個人と国家」にあった。

以上からまとめると、メイン・テーマ「自由」＝「責任ある選択」の実現は、もとより「人と社会の望ましいあり方」を希求する「新しい社会」論としてある。その背後にあるのは、「個人と国家」という原体験である。ひるがえってみれば、ドラッカーの「新しい社会」論の展開は「個人と国家」の問題に突き動かされてのものだったのである。そのプロセスで生み出された「マネジメント」とは、ドラッカーにとって、人間個人が強大な国家に対抗するためにこのうえもなく強力な武器であった。人間個人をパワー・アップし、「自由」＝「責任ある選択」を実現させるものにほかならなかったのである。

かくみるかぎり「新しい社会」論を本質とするドラッカー思想において、その底流にある焦点にして枠組みは「個人と国家」にあるといえるのである。

文献

春日賢：

(2017)「ドラッカーの国家論について」北海学園大学『経営論集』第15巻第2号。

- (2018a) 『『傍観者の時代』について』 北海学園大学『経営論集』第15巻第3号, 2018年3月,
 (2018b) 『『社会の純粋理論』について — ドラッカーにおけるその意義と変遷 —』 北海学園大学『経営論集』
 第15巻第4号,
 (2018c) 『ドラッカーと人間像 — 「産業人」の意義, 「知識労働者」の位置づけをめぐって —』 北海学園大学
 『経営論集』第16巻第2号,
 三戸公 (1971) 『ドラッカー — 自由・社会・管理』 未来社。

- ① *Friedrich Julius Stahl; Konservative Staatslehre und Geschichtliche Entwicklung.* (33) (原題『フリードリヒ・ユリウス・シュタール; 保守的国家論と歴史の発展』) (DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部訳『フリードリヒ・ユリウス・シュタール; 保守的国家論と歴史の発展』所収は『DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』第34巻第12号, ダイアモンド社, 2009年。)
- ② *The End Economic Man; The Origins of Totalitarianism.* (39) (原題『経済人の終わり; 全体主義の起源』) (岩根忠訳『経済人の終わり』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ③ *The Future of Industrial Man; A Conservative Approach.* (42) (原題『産業人の未来; ある保守主義的アプローチ』) (岩根忠訳『産業にたずさわる人の未来』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイアモンド社, 1972年。なお同書は, その後の邦訳タイトル『産業人の未来』として一般に受容されている。)
- ④ *Concept of the Corporation.* (46) (原題『会社の概念』) (下川浩一訳『現代企業論』上巻・下巻, 未来社, 1966年。なお現在同書は, 上田惇生訳による邦訳タイトル『企業とは何か』として一般に受容されている。)
- ⑤ *New Society; Anatomy of Industrial Order.* (49) (原題『新しい社会; 産業秩序の解剖』) (村上恒夫訳『新しい社会と新しい経営』所収は『ドラッカー全集』第2巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑥ *The Practice of Management.* (54) (原題『マネジメントの実践』) (上田惇生訳『現代の経営』上巻・下巻, ダイアモンド社, 1996年。)
- ⑦ *America's Next Twenty Years.* (55) (原題『アメリカのこれからの20年』) (中島・涌田訳『オートメーションと新しい社会』所収は『ドラッカー全集』第5巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑧ *The Landmarks of Tomorrow.* (57) (原題『明日への道標; 新たな「ポスト・モダン」世界に関するレポート』) (現代経営研究会訳『変貌する産業社会』所収は『ドラッカー全集』第2巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑨ *Gedanken für die Zukunft.* (59) (原題『明日のための思想』) (清水敏充訳『明日のための思想』所収は『ドラッカー全集』第3巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑩ *Managing for Results; Economic Tasks and Risk-taking Decisions.* (64) (原題『成果をあげる経営; 経済的課題とリスクをとる意思決定』) (野田・村上訳『創造する経営者』所収は『ドラッカー全集』第4巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑪ *The Effective Executive.* (66) (原題『有能なエグゼクティブ』) (野田・川村訳『経営者の条件』所収は『ドラッカー全集』第5巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑫ *The Age of Discontinuity; Guidelines To Our Changing Order.* (68) (原題『断絶の時代; われわれの変わりゆく秩序への指針』) (林雄二郎訳『断絶の時代』ダイアモンド社, 1969年。)
- ⑬ *Men, Ideas, and Politics.* (70)
- ⑭ *Management; Tasks, Responsibilities, and Practices.* (73) (原題『マネジメント; 課題, 責任, 実践』) (野田・村上監訳『マネジメント』上巻・下巻, ダイアモンド社, 1974年。)
- ⑮ *The Unseen Revolution.* (→*The Pension Fund Revolution.*) (76) (原題『見えざる革命』→『年金基金革命』) (上田惇生訳『見えざる革命』ダイアモンド社, 1996年。)
- ⑯ *Adventures of a Bystander.* (79) (原題『傍観者の冒険』) (風間禎三郎訳『傍観者の時代 — わが20世紀の光と影』) (ダイアモンド社, 1979年。)
- ⑰ *Managing in Turbulent Times.* (80) (原題『乱気流時代の経営』) (上田惇生訳『乱気流時代の経営』ダイアモンド社, 1996年。)
- ⑱ *The Changing World of the Executive.* (82) (原題『変貌するエグゼクティブの世界』) (久野・佐々木・上田訳『変貌する経営者の世界』ダイアモンド社, 1982年。)
- ⑲ *Innovation and Entrepreneurship.* (85) (原題『イノベーションと企業家精神』) (小林宏治監訳『イノベーションと企業家精神』ダイアモンド社, 1985年。)
- ⑳ *The Frontiers of Management.* (86) (原題『マネジメントのフロンティア』) (上田・佐々木訳『マネジメント・

- フロンティア』ダイヤモンド社，1986年。）
- ⑳ *The New Realities.* (89) (原題『新しい現実』) (上田・佐々木訳『新しい現実』ダイヤモンド社，1989年。)
- ㉑ *Managing the Non-Profit Organization.* (90) (原題『非営利組織の経営』) (上田・田代訳『非営利組織の経営』ダイヤモンド社，1991年。)
- ㉒ *Managing for the Future.* (92) (原題『未来への経営』) (上田・佐々木・田代訳『未来企業』ダイヤモンド社，1992年。)
- ㉓ *The Ecological Vision.* (93) (原題『生態学のビジョン；アメリカの状況を反映した内省』) (上田・佐々木・林・田代訳『すでに起こった未来』ダイヤモンド社，1994年。)
- ㉔ *Post-Capitalist Society.* (93) (原題『ポスト資本主義社会』) (上田・佐々木・田代訳『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社，1993年。)
- ㉕ *Managing in a Time of Great Change.* (95) (原題『大変革期の経営』) (上田・佐々木・林・田代訳『未来への決断』ダイヤモンド社，1995年。)
- ㉖ *Drucker on Asia.* (97) (原題『ドラッカー，アジアを語る』) (上田惇生訳『P.F.ドラッカー・中内功 往復書簡① 挑戦の時』『P.F.ドラッカー・中内功 往復書簡② 創生の時』ダイヤモンド社，1995年。)
- ㉗ Peter Drucker the Profession of Management. (98) ((原題『ピーター・ドラッカー，マネジメントという職業を語る』) (上田惇生訳『ドラッカー経営論集』ダイヤモンド社，1998年。)
- ㉘ *Management Challenges for the 21st Century.* (99) (原題『21世紀に向けたマネジメントの課題』) (上田惇生訳『明日を支配するもの』ダイヤモンド社，1999年。)
- ㉙ *Managing in the Next Society.* (2002) (原題『ネクスト・ソサエティでの経営』) (上田惇生訳『ネクスト・ソサエティ』ダイヤモンド社，2002年。)
- ㉚ 『ドラッカー 二十世紀を生きて』(牧野洋訳，日本経済新聞社，2005年 →『知の巨人ドラッカー自伝』日本経済新聞社，2009年として文庫化)
- ㉛ 『ドラッカー全集』全5巻，ダイヤモンド社，1972年。
- 第1巻 産業社会編—経済人から産業人へ
- 第2巻 産業文明編—新しい世界観の展開
- 第3巻 産業思想編—知識社会の構想
- 第4巻 経営思想編—技術革新時代の経営
- 第5巻 経営哲学編—経営者の課題

注

- 1 本稿は，平成31年度北海学園大学学術研究助成（一般研究）による研究成果の一部である。記して，関係各位に感謝申し上げる。
- 2 ドラッカーのメイン・テーマを「自由」と規定したのは三戸（1971）であって，ドラッカー自身ではない。その意味で本稿は，三戸ドラッカー論の範疇にあるものである。
- 3 ①一人ひとりに社会的な地位と役割を与えること，②社会上の決定的権力が正当であること，の二要件である。
- 4 くわしくは，春日（2018b）を参照されたい。
- 5 くわしくは，春日（2018b）を参照されたい。
- 6 くわしくは，春日（2018c）を参照されたい。
- 7 彼の国家論そのもので主張されるのは，要するに「小さな国家・政府」ということになる。「大きな国家・政府」をやめて国家・政府は全体的なガバナンスに専念し，具体的な行動はできるだけ下位の諸組織に権限委譲してしまうというものである。くわしくは，春日（2017）を参照されたい。
- 8 文献⑩ p.162，掲載邦訳 248-249頁。
- 9 掲載邦訳，日本語版への序文，2頁。